

# 日本人英語学習者コーパスを利用した照応表現と談話の一貫性の考察

駒田ゆき子

三重大学大学院

人文社会科学研究所(三重大院)

[komada.yu@zb.ztv.ne.jp](mailto:komada.yu@zb.ztv.ne.jp)

吉田悦子

三重大学

人文学部(三重大)

[tantan@human.mie-u.ac.jp](mailto:tantan@human.mie-u.ac.jp)

## 1. はじめに

談話とは、単に個々の発話がいっつか集まったものではなく、そこには伝えたい情報(意図)について一貫性(coherence)がなければならない。一見、同じ情報を伝えているように見える談話であっても、表現形式や表現方法の違いによって意味の多様性が引き起こされることがある。またそれは同時に、聞き手や読み手がその談話の意図を理解するための推論量(inference load)の違いをも引き起こしていると言えるし、この推論量の違いこそが、談話における一貫性のばらつきの根底にあると考えられている(Grosz *et al.* 1995)。

Grosz *et al.* (1995) は、この推論量の違いを説明するための一つの手段としてセンタリング理論という局所注意状態のモデルを考案した。すなわち、談話単位内における注意の焦点(focus of attention)、照応表現の選択(choice of referring expression)、発話と局所的一貫性(coherence)の関係性について説明し、一貫性のばらつきは照応表現の違いによる推論量(inference load)に対応しており、センタリングによってモデル化される注意状態の特徴がこれらのばらつきを説明できると論じている。

本稿では、The NICT JLT Corpus (2004) の日本人英語学習者(NNS)と英語母語話者(NS)の話し言葉の談話にセンタリングモデルを適用し、比較対照することによって、日本人英語学習者の談話における指示表現の特徴と問題点を明らかにしたい。すなわち、談話の展開に応じて、焦点となっている談話要素の推移がどのような指示表現によって担われているか、談話の一貫性にそれらの指示表現がどのように貢献しているか、という点について考察する。

## 2. 研究方法

### 2.1 言語データについて

利用したデータは、スピーキングテストに基づいてレベル分けされている The NICT JLT Corpus (2004) のデータであり、データのジャンルは6コマの絵によるストーリーテリングを選んだ。被験者は日本人英語学習者(NNS)6名(SST レベル7、8、9のうち男女各2人のデータを抽出。TOEIC800~900台の上級レベルの英語力を持つ)と英語母語話者(NS)6名(20~24歳、在日期间1年未満の米国人男女)で、コーパスから無作為に抽出した。ストーリーのタイトルは“CAR ACCIDENT”で、その内容は、車を運転している人とケータイで話をしながらバイクに乗っている人が事故を起こし、途中で警察官が登場する、というものである。

発話単位は主動詞を含む節とした。ただし、関係詞節や補文は主節に含むことにしたが、分析の対象からは除いている。

### 2.2 分析方法

NS と NNS の談話にセンタリングモデルを適用することによって、談話単位内での局所焦点の移り変わりに注目し、それぞれの談話の一貫性(coherence)を検証する。具体的には焦点を担っている指示表現の分布とその遷移パターンについて分析を試みる。分析の内容は、話題の焦点(Cb)と遷移パターンの分布(3節)、Cbの遷移パターンにおける指示表現の分析(4節)、遷移パターンの連続の傾向および指示表現パターンの分析(5節)の順序でおこなう。

### 3. 話題の焦点 (Cb) と遷移パターンの分布

まず、6コマの絵によるストーリーテリングの談話要素(discourse entity)のうち話題の焦点(center : Cb) と呼ばれる要素について分析する。Cb 及び no Cb の総数は NS の 110 に対して、NNS は 82 であった。この Cb の分布を4つの遷移(Continue:CON, Retain : RET, Smooth Shift : SMOOTH, Rough Shift : ROUGH)及び no Cb を加えて表したのが図1と図2である。

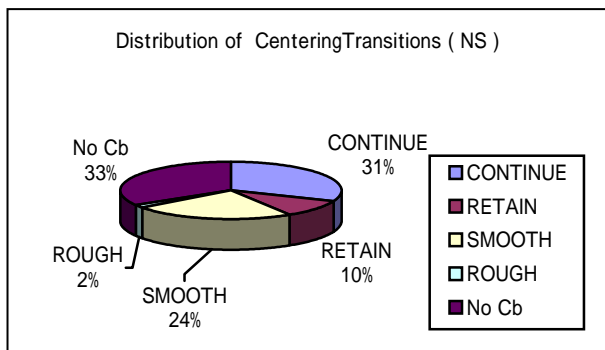


図1：遷移パターンの分布（英語母語話者）

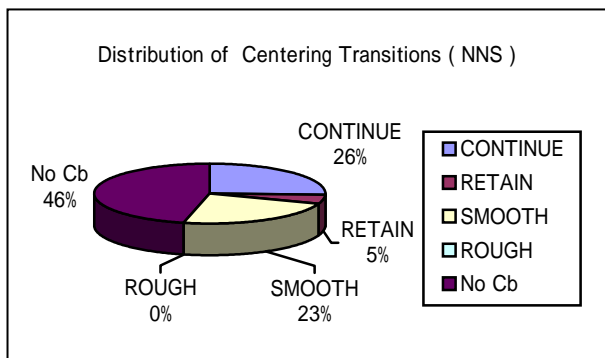


図2：遷移パターンの分布（日本人英語学習者）

NS、NNS とともに no Cb の割合が最も多く、NNS では 46% とほぼ半数近くにのぼっている。NS では CON の割合が no Cb の割合とほぼ同じで、3分の1を占めている。no Cb の割合が高いのはストーリーが6コマの絵で区切られており、話題が頻繁に変化することも一因かと考えられる。センタリング理論では no Cb が続くことは一貫性の低さを示していることを意味する。しかし、実際に別の視点で分析してみると、必ずしも一貫性に欠けるとは言えない

例もある<sup>1</sup>。

(1)

1. One day last week, *I was I was* driving in my car, NULL
2. and all of a sudden *this motorcycle* comes up. NULL
3. And *he's* talking on the cell phone to, I don't know who, maybe like his girlfriend or somebody. NULL

(NS : 00014)

1.2.3. はセンタリングモデルを適用すると、NULL が続く。しかし、2 と 3 のつながりを見ると、*this motorcycle* には当然運転手がいるわけで、3 の *he* がだれであるか聞き手は容易に推測することができ、一貫性は保たれているといえる(Prince 1981)。同様の例が NNS のサンプルにも見られる。

(2)

1. Uh-hum So urm (*this man* here) *he was just driving* urm (as usual) at 【as】 daily routine. NULL
2. And then, urm from the other side it came this ur motor scooter. 【this motor scooter came.】 NULL
3. And *this guy* was er actually speaking with his girl friend on the cell phone. NULL

(NNS : 00287)

3 の *this guy* は 2 の *this motor scooter* の運転手であることは状況から明らかである。また、1 の *this man*、2 の *this motor scooter*、3 の *this guy* は、絵に表された状況の中における談話要素として Prince(1981)が *situationally evoked* と定義した、聞き手が容易に理解できる内容の連鎖と考えられる。

また、NNS では RETAIN が 5% であり、NS (10%) の半分の割合である。RETAIN はそれまで続いてきた Cb が次には移動すると予想される場合であり(石崎・伝 2001)、NULL-CON-RET-SHIFT という好ましい遷移パターンにおいて CON と SHIFT のつなぎの役割を担う遷移である。この RETAIN の出現が少ないことは、NNS では話題を担う Cb の遷移がスムーズに移行していない可能性を示唆している。

1 例文中、< >はフィラー、( )は言い直し、自己訂正、【 】は文法的な誤りの訂正を示す。

#### 4. Cbの遷移パターンにおける照応表現の分布

4節では、各遷移パターンにおける注意の焦点が、どのような照応表現で担われているかに注目する。3節で示したそれぞれの遷移パターンについて、照応表現をゼロ代名詞 (ZERO) 代名詞 (PRO) 名詞句 (NOUN) 指示代名詞 (DEMON) に分類して、その頻度を次のグラフで示した (図3)。

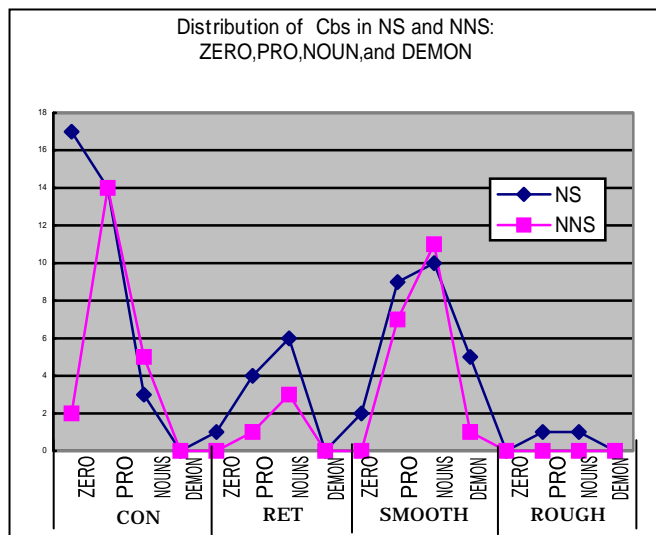


図3：各遷移における照応表現の分布

CON 遷移を担う Cb についてはゼロ代名詞の使用に顕著な差が見られるが、他はおおよそ同じ傾向を示している。話題の焦点 (Cb) と局所的談話における一貫性の関係については、主語位置に来る要素が重要な役割を果たしている。センタリング理論では、この位置に代名詞がくると、最も受け手の推論量が少なく、一貫性が築きやすいとしている (Grosz et al. 1995)。NS では CON 遷移 34 のうち 31 で主語位置にゼロ代名詞か代名詞がきており、この先行研究を支持する結果となっている。主語位置に名詞句が来るのは、談話の導入部分や新しい登場人物の登場時、また曖昧性をさけるために用いられており、この点についてもほぼ先行研究の通りであった (神崎 1994)。次の例では 2,3,4 と CON 遷移が続き、5 で新しい要素が導入されている。

(3)

1.All right. So one day last week, <cough>

2 例えば、*this guy* のような指示形容詞+名詞句は名詞句として分類した。

*I was driving in my car,* NULL  
 2. [ZERO] just driving the car like  
*I normally do,* CON  
 3. [ZERO] going to work. CON  
 4.And <ur>< cough> (I was taking a turn)  
*I was making a turn.* CON  
 5.And there was *this guy* (on a motorcycle)  
 on a scooter, actually. NULL  
 (NS : 00013)

一方、NNS では、CON 遷移 21 のうち 14 が代名詞であった。ゼロ代名詞は 2 例にすぎず、NS と比較すると極端に少ない。これは、NNS では分詞構文の使用が少ないことが一因である。また、全体的に名詞句の使用が NS に比べて、多いと言える。

(4)

1.O K. One day last week, *a man* was driving a car. NULL  
 2.And at the same time, *the other man* was driving a bike making [a] telephone call to (her girl) his girlfriend. NULL  
 3.And then *these two vehicles*<sup>3</sup> just collided. SMOOTH  
 4.And ( at that time ) at that moment, *the man* who was driving the motorcycle, (dropher) he drop his cell phone. NULL  
 5.And *that man* was complaining about the cell phone. CON  
 (NNS : 00320)

NNS の例では車の運転手が “ a man, the other person, the man ”、バイクの運転手が “ the other man, the man, that man, the other person ” と同一人物に対して異なる名詞句で照応関係を示している。このような照応の仕方は NS では見られなかった。

#### 5. 遷移パターンの連続の傾向性および照応表現パターンの分析

5節では、3節でとりあげた遷移パターン (CONTINUE, RETAIN, SHIFT) の組み合わせの中で、どの遷移パターンの組み合わせが談話の展開に好んで用いられているか、また各遷移パターンにおいてどんな照応表現が生起しているか、という点から NS、NNS の談話を比較対照する。NS の遷移パターンで繋がりがみられたものの数は 72、NNS は 44 である。それぞれの遷移パターンの繋がりと、生起している Cb の照応表現を示したのが、次の図

3 *these two vehicles* と a bike のようにある要素が他の要素の一部分を占める場合は Smooth Shift とした (Hurewitz 1998)。

である ( 図 4 と図 5 )。

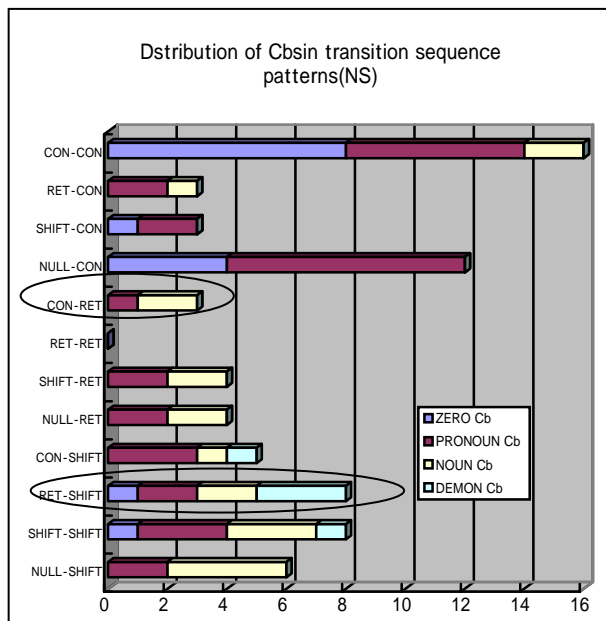


図 4 : 遷移パターンの連続と指示表現 ( NS )

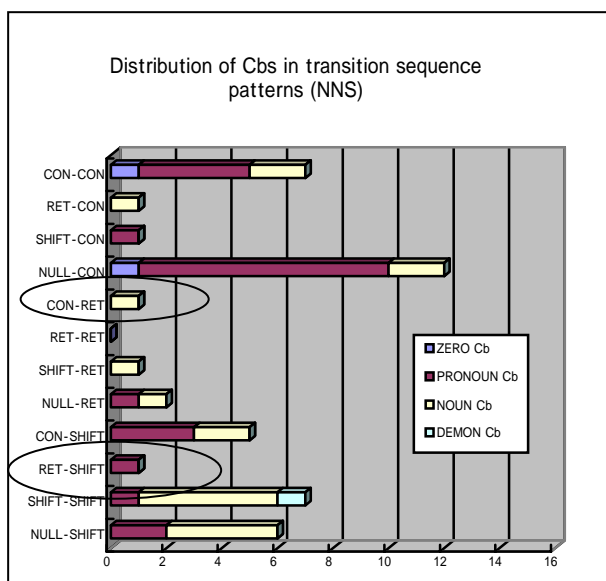


図 5 : 遷移パターンの連続と指示表現 ( NNS )

NS では、Cb の高い連続性を示す CON-CON が最も優勢である。理想的なセンター移行の流れを形成する NULL-CON-RET-SHIFT-CON( 竹井他 2005、吉田 2006 ) のそれぞれの繋がり ( NULL-CON、CON-RET、RET-SHIFT、SHIFT-CON ) が数の差はあるが、まんべんなく見られる。特に CON-RET と RET-SHIFT は少ないサンプルの中ではあるが、

NNS に比べて高い割合で生起していると言える。

NNS では、CON-CON よりも NULL-CON の数が多く、また CON-RET、RET-SHIFT の数が 44 例中それぞれ 1 であるという点から考えると、センターの継続が少なく、話題の変化が頻繁に起こっていることが読み取れる。

## 6 . まとめ

NS と NNS の談話の特徴を注意の焦点(focus of attention)、照応表現の選択(choice of referring expression)、発話と局所的焦点の一貫性(coherence) の関係に注目して分析した。NS と比べて NNS では、センターの連続性や好ましい移行の流れが少なく、代わりに話題の変化が多く見られた。センターの連続を示す CON 遷移ではゼロ代名詞の生起や名詞句の使用に顕著な差があったものの、他の遷移では話題の焦点 Cb の照応において、おおよそ同じ傾向を示した。今後の課題としては、NULL の分析や SHIFT-SHIFT、NULL-SHIFT の分析については、センタリング理論では補いきれない点があるので、大局焦点の導入や他の視点からの分析を加える必要がある。また、より多くの量的分析が望まれる。

## 参考文献

- Grosz, B.J., & Weinstein, S. (1995) " Centering : A framework for modeling the local coherence of discourse." *Computational Linguistics*, 21/2, 203-225.
- Hurewitz, F. (1998) " A quantitative look at discourse coherence" In Walker et al. (eds) *Centering Theory in Discourse*, 273-291. Oxford : Clarendon Press
- 石崎雅人・伝康晴 ( 2001 ) 『談話と対話』東京大学出版会
- 和泉絵美・内元清貴・井佐原均 ( 2004 ) 『日本人 1200 人の英語スピーキングコーパス』東京 : アルク
- 神崎高明 ( 1994 ) 『日英語代名詞の研究』東京 : 研究社
- Poesio, M.,Stevenson,R.,Di Eugenio, B., and Hitzeman, J.(2004) "Centering : A parametric theory and its instantiations" *Computational Linguistics*, 30/3, 309-363.
- Prince, E.(1981) " Toward a taxonomy of given - new information " In P. Cole(ed.), *Radical Pragmatics*. N.Y. .223-56.
- 竹井光子、相沢輝昭、藤原美保 ( 2005 ) 「コーパスとしての教材 : 語学教師のための分析とツール」言語処理学会第 11 回年次大会発表論文集
- 谷村緑、竹内和広、伊佐原均 ( 2005 ) 「英語教育のための照応詞使用についての調査」言語処理学会第 11 回年次大会発表論文集
- 吉田悦子 ( 2006 ) 「日英語パラレル対話コーパスにおける名詞句の連鎖パターンの語用論的考察」言語処理学会第 12 回年次大会発表論文集